ナクトンガン視察についての所感

向井貴彦

2024年8月28日から8月30日の韓国訪問における報告として所感を述べる。利水や行政的な調整に関しては他の委員の報告に委ねたい。

ナクトンガンは全長525km、流域面積約2万3千平方キロメートルであり、長良川(166km、約2千平方キロ)よりも圧倒的に規模の大きい河川である。現地では環境面の話を中心に聞く機会が無かったが、航空写真や地図を見る限りではナクトンガンと西ナクトンガンに囲まれた低地帯の市街地化、都市化を抑制し、周囲の都市化エリアと明確に分けられているように見えた。日本においても、近年は豪雨による増水を河道内に封じ込めることに限界があるとして、流域治水が考えられるようになってきているが、おそらくはナクトンガンのような日本には存在しない規模の河川では洪水を完全に防ぐことは非現実的であるために、治水に対する考え方にも差があるように感じた。

ナクトンガンと長良川の自然環境については、河川規模の違いもあって単純な比較は難しいように感じられた。ナクトンガン河口堰の部分的な開放は水質悪化への対応という面があり、現状においても視察時にアオコの発生が見られた。ナクトンガン左岸側の河口堰の魚道上流側は河川水が滞留しており、著しいアオコの発生が生じていたため、ナクトンガン下流の水質はかなり富栄養化が進行していると考えられる。取水によって河口堰の上流側の水面が下流側より低くなるとの話もあったため、低層に海水を遡上させることで河川水位を高めて上層の淡水を取水しやすくするとともに、富栄養化した河川水の希釈もしくは海への排水を促すといった面もあるのかもしれない。

また、ナクトンガン河口エコセンターの展示等から、ナクトンガン河口の生物相は日本の有明海に類似していることがあらためて理解できた。ムツゴロウやハゼクチ等の日本では有明海周辺にしか見られない魚種が生息し、河口堰上流ではアオコが大量発生するなど、河口堰周辺の自然環境と、河口堰による影響は、長良川よりもむしろ諫早湾調整池の問題に近いように感じた。

ナクトンガン河口堰に設置された魚道は長良川河口堰のものと類似しており、魚道観察室の説明展示では多様な魚種が遡上するように書かれていた。しかし、魚道の効果は遡上が見られた種数だけでなく、遡上量も重要であるため、実際にどの程度の量的効果があるのかは不明であった。2日目のK-waterでの説明も、ウナギの遡上についての調査結果は示されていたが、他の生物については調査されていないのかもしれない。また、魚道観察室自体は明るく作られており、市民が見学に来た場合の印象は長良川よりも良いかもしれないが、説明書きの正確さに疑問を感じる部分もあり、魚類学者等が適切に関わっているのかどうかは疑問を感じた。

長良川においては、塩分の遡上が無くなったこととともに、河口堰上流の水位変動が無くなったことが下流域の生物群集に大きな影響を与えているが、ナクトンガンにおいても河口堰上流の水位変動は復元されていない。しかし、河口堰下流側の中州は全体が干潟と抽水植物帯から成る湿地として保全されており、河口周辺の生物群集（および漁業資源）の保全や沿岸の水質改善には寄与していると考えられる。長良川など木曾三川の河口周辺に当てはめて考えるなら、伊勢湾奥部の木曾岬干拓地をすべて湿地にして自然保護区にしているようなものである。長良川においても、河口堰開門による上流側の環境改善も重要だが、愛知県・三重県による「木曾三川エスチャリー」としての自然環境の重要性の啓発や、そうした三川の河口域全体の保全戦略を検討し、その中の重要なポイントの一つとして長良川河口堰を位置づけるべきかもしれない。

こうした市民等への啓発に関しては、1日目の韓国 NGO との交流において朴萬俊名誉教授の講演などを聞くことができた。講演の中で、「新しい言葉が必要」として、そうした社会を動かすための言葉や概念の重要性が語られていた。個人的には、現在の日本社会では、概念的な言葉で社会を動かすのはなかなか難しいように感じるが、長良川河口堰問題に対して「無駄な公共事業」「アユへの影響」という、これまで語りつくされてきた言葉を鸚鵡のように繰り返すのではなく、より広い視野で自然環境の回復（ネイチャーポジティブ）を考えられるようにするべきと思う。